東方花妖怪

八雲糖類おぅ@甘味摂取中...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方花妖怪

【Ｎコード】
Ｎ６７７２Ｙ

【作者名】
八雲糖類おぅ@甘味摂取中・・・

【あらすじ】
風見幽香を小さくした感じの男の娘が幻想入り！？とりあえず夢幻館メンバーあたりと絡ませる予定です。　※この作品は作者のもうかたっぽの作品が詰まったとき、やる気でないときに更新しますのであまりマメに更新できません。ゆっくり気長に生暖かい目で見守ってくださいね（断る

いちわめ　ちびゆうかりん？（前書き）

はじめまして、もしくはこんにちは糖類おぅと申すものです。
特にありませんが見てくださいね。文才カスですけど

いちわめ　ちびゆうかりん？

ここはとある町のアパートの一室。その部屋のベットには１０人中１５人が振り返るほど可憐で幼さが残る顔の人が眠っていた。時刻は６時代で空は澄んで、鳥がＴＮＴＮと鳴く声が聞こえる。

ピピピピッ！ピピピピッ！

「ん・・・・ふぁ～。よく寝た～」

目覚まし時計の鳴る音で目を覚ます。体を起こし、背伸びをしてからベットから出る。

「今日から新しい学校ねぇ・・・・変なのがいないと良いのだけど」

寝室から洗面所に行き、顔を洗い、自慢の緑色のショートヘアーを梳かす。それが終わると今度は台所に行き簡単に朝食を作る。作るといってもトーストだけであるが。差し詰め料理は出来ないのだろう。

「うるさいわね。余計なお節介よ」

・・・・と言ってる内にトースターから怪しい煙が出てきた。

「えっ！？ちょ・・・なにこれ！？ゲホッゲホ」

どうやらトーストも作れなかった様だ。白い食パンがあっという間にダークマターと化してしまった。

「まったく。このトースター駄目ね。新しいの買ってこないと」
自分の失敗を完全にトースターに被せ、ダークマターをゴミ箱に捨てる。そんな常人じゃありえない朝食作りをしたせいで登校時間になってしまい、急いで制服を着る。
「今回の学校のスカート丈短いわね。どんな性に飢えたやつが作ったのかしら」
制服に対し毒を吐きつつも着々と準備を済ませる。
「これで・・・よしっと。それじゃ、いってきます」
誰も声を返すことはないものの挨拶をしてから学校に向かう。

＞???（主人公）視線＜
「しつれーしまーす。山田先生はいらっしゃいますでしょうか？」
とは言ったものの教員はまだ数名しかおらず、私の学年を考えるとどれが山田かわかってしまうが一応聞いておく。
「おお、ここだ。って君は・・・」

声がした方向を見てみると絶対に一生童貞確定のキモデブのおっさんがいた。やだあれ近づくと穢れそう。

「本日付でこの学校に転校することになってた者ですが・・・受付の方に聞いたら担任になる先生の山田先生の所へ行けと言われたので」

「えっとすまないがこっちがもらった資料では男って書いてあるんだが・・・・多分記入ミスだろう。後で直しておこう」

まあ女顔っていうのは否定しないわ。けど資料に書いてあるものって私直筆じゃない。なんでそれが記入ミスなのよ。なんかぶん殴りたくなってきたわ。

「いえ、それは結構ですわ。私、男ですもの」

転校早々問題起こすのはいろいろとまずいから必死に堪え、笑顔でそう伝えてやったわ。

「「「「マジで！？」」」」

あろうことか教員全員がこっちを見てきた。別に私は視姦なんて興味ないからうれしくもなんともないんだけど・・・・

「マジよ、悪かったわね女顔で」

「・・・・すまない。そっそれじゃ時間だな。クラスへ行くぞ」

逃げたなこいつ。

「それじゃ、俺が入って来いって言ったら黒板に名前書いて自己紹介しろよ～」

そういうとガラガラッとドアを開け入って行った。どうやらＨＲをやってるようね。なんか生徒の声で転校生がどうのこうのって聞こえるけどどっからそんな情報が流れるのかしら。

「おーい入ってこーい」

キモデブが呼んできたので教室に入る。それまでがやがや五月蝿かったのが嘘みたいにシンと静まり返った。逆にこういうのやられるとやりにくいんだけど・・・・

とりあえず黒板に名前を書く。風巳（かぜみ）　幽花（かすか）っと。

「今日からこのクラスに入ることになった、風巳幽花よ。あんまり馴れ馴れしくするとぶっ潰すからよろしく」

「ツンデレロリッ娘ゆうかりんひゃっほおおおおおおおお！」

「すっげえええええ！幻想郷からちっちゃい幽香様が来たアアアアアアア！」

・・・・・なにこれこわい。

「あんたら私の自己紹介聞いてないの？私の名前はか・す・か！KA・SU・KAよ！」

「ゆうかりん萌え～」

「ゆうかりんかわいいよおおおおおおおおおおおお！」

だめだこいつら。

そんなこんながあってもう放課後、下校中よ。しょうもない変態共には制裁をくわえといた。そのときも「ああ！幽香様もっといじめてください！」なんていってきたからあいつらはもう救いようがな

いと思う。

「あっそういえばトースター買わないと・・・」

朝、故障（してない正常な）したトースターはとりあえずペチャンコにしておいた。

とりあえず値が張っててもいい物を買わないとね。

って、あれ？いきなり視界が霞んで・・・・・・

気づけば森の中だった。

「・・・・・・ここどこよ？」

なんとなく言ってみたもののただその言葉は木々に掻き消された。

このまま誰もいない様なトコにいてもしょうがないので近くの木の枝を折り、それを棒倒し（一人で）をして倒れた方向に歩いて行った。

「いつまで歩けばこの森をでれるのよ・・・・・・」

途方に暮れた。もう無理限界。寝よ・・・・・・

ガサガサッ

「何っ！？」

音のした方向を見るとカールのかかった金髪で赤黒いワンピース、帽子をかぶった少女、両鼻から大量の血を流して、いや噴出して危ない目をしながらハァハァ言ってこちらを見てる少女がいた。

・・・・・・なにこれこわい。このセリフ何回目かしら？

いちわめ　ちびゆうかりん？（後書き）

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

にわめ　へんたい！（前書き）

どうも、糖類です。
そういえばもうかたっぽの小説でもちゃんとした挨拶したこと無いのでここでします。

と考えてた時期が私にもありました。趣味は糖分摂取とガーデニング。好きな花は彼岸花です。

それとここの主人公、風巳幽花ちゃんの説明。身長は大体レミリアとかそのあたりの面子より少し大きいか小さいかぐらいの見事なロリです。ナニはついてますけどねw

それでは第二話です。酔狂な方だけどうぞ～

にわめ　へんたい！

「ハァハァ小さい幽香様ハァハァ」

少女は尋常じゃない量の鼻血を流しながら幽花にジリッジリッと近付いていく。元は綺麗な顔立ちのはずが鼻血と変態じみた行動により全て台無しになっている。また、幽花はその少女の異常行動に怯え、若干ばかりなみだ目になっている。

「ハァハァ・・・・幽香様襲って良いですよね？襲って良いんですよね？そんな淫らな格好をしてるってことは欲情していいってことですよね？」

淫らな格好？と何のことか分からなかった幽花だが自分の服を見てみると、今日下ろしたばかりの制服が厭らしい感じに破け、スカートがピラッと捲れて中の純白のパンツがこんにちわと言っていることに気づき一気に顔を茹蛸のように真っ赤にする。

「ちっ違うわよ！これは・・・・その、そういった訳じゃなくて・・・・不可抗力で・・・・・ってそれ以前に『ゆうか』って誰よ！私は「かすか」よ！」

「へー不可抗力ですか。そうですか。では私が今から行うことも不可抗力ってことで良いですよね？それに幽香様では無くて貴女は『かすか』というのですか。またまたご冗談を。そんなわけ無いじゃないですか。確かにロリっ気がかなり増してますけど可愛いですし、可憐ですし、いい匂いしますし、そそられますし、可愛いですし、可愛いですし・・・・・ね？」

それに対し、イヤイヤと首を振る幽花。しかしその行動は少女をより一層過激にさせてしまう要素であることに気づかない。

「ぶはっ！？・・・・・・くっ、上目遣い&なみだ目だけでイケるのにさらに首を振る、ですか。どれだけ欲情させれば済むのですか。グハッ」

思わず鼻血の量を増やす少女。少女の周りには血がいたるところに飛び散っていたり池を作ったりしている。それを見て、よくこんなに鼻血がでるもんだなぁと現実逃避する幽花。

「うふふふ、ふふふふふふふ、うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

ゆらり、ゆらり、そんな効果音がつきそうな歩き方で彼女（彼）近づく少女。顔の上半分は髪の毛で見えなく、下半分は下半分で鼻血で真っ赤に染まり口はニタァと笑っている。B級ホラーで出てきそうだ。そんなホラーに心が若干折れかかっている幽花が耐え切れるわけなく、

「ひぃ！？ヒック・・・こないでぇ・・・こないでよぅ・・・ヒック」

と泣きそうになりながらも懇願するも無常にも少女は彼女（彼）の目の前まで来てしまった。

「ハァハァ幽香様、ペロペロ」

「ひゃうぅ！？やっ・・・りゃめ！舐めちゃやらぁ」

元々、女の子のような顔と声と性格で周りからはまず男として見られたことが無かった幽花。女の子に告白しても「ちょっと冗談はよしてよ～」や「いえ、私は百合には興味ないので」と言われる始末であったので『そういった行為』なんぞしたことが無い。要は初心だ。そんな彼女（彼）が首筋をいきなり舐められて感じない分けない。

もう誰がどう見ても女の子である。最早男の娘ですらない。

「ぶふぉあ！どれだけ忠誠心を出させれば済むのですか？そうだ、したの方も舐めｔ、へヴァアアアアアア！？」

「ふぇ？・・・・え？」

突然、お空のお星様となった少女に頭が追いつかない幽花。それもその筈、たった今自分を襲っていたものがいきなり吹っ飛んでしまえば理解できないものである。

「まったく、また仕事サボって。しょうがないわねぇ」

彼女（彼）がそんな声のした方を見ると緑の髪の女性、まるで彼女（彼）を大きくしたような女性がいた。

＞？？？（作者の嫁）目線＜

お花の水遣りのついでに門の様子を見に行ったらそこはもぬけの殻。

かわりに「可愛い娘を探してきます。探さないでください」なんてふざけた置手紙と逆刃の大鎌が。しかも血のしずく・・・まあ恐らく鼻血なんだろうけど、そのしずくが点々と逃走者の門番の居場所を知らせてくれる。というか鼻血たらしながら可愛い娘を探すって恐ろしすぎるわ。

そして門番を探し始めてすぐ、本当にすぐに見付かった。茂みに隠れて一方向を熱心に見詰めている。何を見てるのかはちょうど木で見えない。あっ鼻血の量が増した。

「うふふふ、ふふふふふふ、うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

あれは危ない。絶対に危ない。このままじゃきっと大変なことになるわ。まあその展開を見ていくのも一興だけど。はぁ。

「マスタースパーク」

とりあえずサボタージュをかました門番は処刑しといた。それで、あの子が襲おうとしてたのは何かしら？

「ひっく・・・・・・グスッふぇえええええん」

なにあれ可愛い。それにどこか、世界で一番美しくて可愛らしい少女に似てるわね。えっ？誰って？察しなさいな、私こと風見幽香よ。その子はとても可愛らしい声で泣いている。もう可愛すぎてゾクッ

とくるわねぇ。これはもう私の妹にしないと気がすまないわ。

「そこのあなた、怪我しなかった？怖かったでしょう、もう大丈夫よ」

「怖かったよぅ・・・ふぇえええん！」

「ぶっふぁあ！？」

あ・・・危ない危ない。近づいてしゃがみ込んであやしたら飛び付いてきた。それで良い香りで思わず忠誠心が出ちゃったけど仕方ない。

「うふふ、怖かったわよねぇ。でももう大丈夫だから安心しなさいな」

「ひっく・・・ぐすぅ・・・・・・くぅ～」

あら？緊張がほぐれたのかしら。寝ちゃったわね。ふふ、寝顔も可愛いわねぇ。でも寝てる方が好都合ね、今のうちに館に運んでおきましょう。うふふ、これからが楽しみだわ♪

少女移動中・・・

にわめ　へんたい！（後書き）

読了感謝です！
うん、強引過ぎた。ラストは変ですね。まあ次からがんばろうw
見事なカリスマ（もどき）ブレイクwはんぱねぇw
それと一話でなぜ気を失ったかを説明します。「多分貧血じゃね？」です。
深く考えないでください・・・・すみませんすみません。

次話の最初で旧作キャラの大まかな説明いたしますので「旧作シラネ」の方でも楽しめるようがんばりますね

感想だろうとコメントだろうと何だろうと構いません！お気軽に感想にお書きくださいな～

さんわめ　むげんかんにて（前書き）

ども！糖類です。
二連続でこっちを投稿しましたw
うん、ゆうかりんのせいだ、絶対にw
とりあえず旧作キャラの設定を・・・とおもったのですが大体作中に書いときました。また新しいキャラや場所が出るたび書いてこうと思いますw

では、物好きな方だけどうぞ！第三話です

さんわめ　むげんかんにて

草むらからところ変わって、とある館。人呼んで『夢幻館』。青を基色としていてあちらこちらに花壇がある。名前は現実世界と夢幻世界の狭間に位置している事から由来する。そんな館の一室に幽花はいた。

「・・・・・・んあ、あれ？ここは？」

「あら起きたの。気分はどうかしら、幽花ちゃん」

徐々に覚醒し、先の泣き出したことや幽香に抱きついたことを思い出して顔を赤らめる幽花。

「うぅ・・・その、迷惑かけてごめんなさい」

「うふふ、顔を赤くしちゃって可愛いわね」

「そんな、可愛くなんか・・・・・ってあれ？何で私の名前を」

「ああ、それなら勝手にこれを見せてもらったわ」

とスカートのポケットから彼女（彼）の学生手帳を取り出す幽香。そこには名前、年齢、性別などが書き記されていた。

「まさかとは思うけど本当に男？」

「本当に男よ」

問いに即答する彼女。なお、未だに顔は赤い。

「そう・・・でも顔は女の子よね。それに私に似てとても可愛いからいいわ」

「見た目じゃなくて性格も大事だと思うわ」

少々ズレた回答をするも幽香が軽く無視をするだけで終わり、そのまま彼女の寝ているベットに座り込む。

「大丈夫、性格っていうか口調も女の子だし」

「そういうものなの？」

「そうよ。あとは・・・・そうね、その服着替える？」

まさか、と自分の服を見る幽花だが、案の定服はいい感じに破けていた。

「へ！？・・・・あ、う・・・・・・・いやあああああああああああああああああああああ」

「普通逆じゃないかしら？」

ごもっともである。

それからしばらくして落ち着きを取り戻した幽花は幽香の選んだ服、幽香と殆どおそろいの服に着替えた。違う点をあげるとスカートの丈が短い事と全体的にサイズが小さい事だけである。もとから幽香に似ていたがその服を着たせいで完璧なロリ幽香となってしまった。

「ええっと・・・これでいいの？」

以前、館の一室改めベットルームにはほとんど流される形で着せられたためついていけない幽花と

「いいわ。最高よ」

恥じらいながらも完璧に着こなしている彼女をみてうっとりとしている幽香がいた。
先ほど空の光の一つとなった門番の少女が見たら二人に発狂しながら飛び込んでいただろう。

「さて、着替えも済んだことだし・・・・そうね、あらためて自己紹介でもしましょうか？」

「普通逆じゃないかしら？」

「いいじゃない別に、絶対の順番なんてないんだもの。貴女はもうわかるから、私ね。私は風見幽香。この館、夢幻館の主で貴女の姉になる妖怪（ひと）よ。ここの部屋は自由に使っていいわ、貴女の部屋ですもの。これからお風呂場とかそういったとこ案内するわ。まあざっとこんな感じかしら、これからよろしくね」

そう言うとベットから腰を上げ、ドアの方まで歩いていく。

「え、うん。よろしく・・・・・って、ちょっと待って！」

幽花の呼びかけで振り返る幽香。表情は実に満足げだ。

「何かしら？嗚呼、呼び方ね。自由に呼んでくれていいわ。幽香でもゆうかりんでも、あわよくばお姉ちゃんなんてでもいいわよ」

「じゃあ、幽香で・・・じゃなくて！おかしいでしょ。つっこみどころありすぎよ！私の部屋って何よ！？それに第一、私の姉ってなんで！？」

流されっぱなしだったがここぞとばかりに彼女自身の不満をぶつける。

「あら、言ってなかったかしら？貴女、外来人でしょ？」

「ふぇ？がいらいじんって何よ？」

と可愛らしく首をかしげた幽花であった。

＞幽香視線＜

とりあえず幽花には幻想郷の必要最低限のことは教えておいた。新しい事を教えるたびに目を光らせたり、食付いてきたり、怖がったりと実に感情豊かで可愛らしいったらありゃしない。

「分かった？外はとっても危険な生物がいっぱいなの。幽花みたいな可愛い子がぶらついてるとすぐにおそわれちゃうのよ。だからそんなとこに野宿してみなさい、一発よ？だからそれを防ぐために住家とボーディガードを提供するから代わりに貴女は私の妹になる、発音は同じだけど義妹じゃないわよ。いいわね？」

「うぅ・・・わかったわよ」

うん、やっぱり素直が一番よね。

「さて、それじゃお部屋案内しましょうか」

そういって掛けてた椅子から立ち上がると部屋をノックする音が聞こえた。

「しつれいしま～す。お掃除しにきましたよ～」

ドアを開けた者の正体はロリっ気がある顔立ちと金髪ロングと背中の大きな黒い羽がトレードマークの少女だった。

「あらくるみ、いいところに来たわね。この子がこの館の二人目の主人で私の可愛い妹の幽花よ」

「えっと、はじめまして！私はこの館の門番と世話係を兼ねてるくるみです。よろしくお願いします！」

「ああ、うん初めまして、幽花よ。まあ成り行きだけれどお世話になる事になっちゃったからよろしくね」

これであと一人とあわせれば館の面子との挨拶は終わるわね。われながら幽花と使用人合わせても４人しかいないのにこんな馬鹿でかい屋敷に住んでるのはどうかしてると思うけどしょうがないわよね。

「気を取り直して、こんどこそ部屋案内を・・・・・ってアンタはなにやってんのよ」

ドアを開けるとそこにはさっきマスタースパークで吹っ飛ばした筈のもう一人の門番が荒い息をしながらたっていた。

さんわめ　むげんかんにて（後書き）

どうもー読了感謝です！
そしてここでいらないいらないカミングアウト。
実はくるみなんですが公式設定だと世話役ではなく、ただの門番です。でも家事をゆうかりんだけでするわきゃないだろうと思って門番二人組を世話役としてしまいました、すみません。
そしてもう一つカミングアウト！
今作で変態と化すであろう人物を先に書いときます。
エリー（変態）、咲夜さーん（ロリコン）、絶対ゆる早苗（ロリコン）となります。
無理な人はすみませんでした。他にも増えるかもです。あんま増やしませんがw

感想なりコメントなり何なりいつでも受け付けております！というかむしろ大々歓迎です！感想の量が私の原動力ですw
ついでにリクエストも受け付けますよ！出来る範囲でw
というわけでまた次回！

よんわめ　こんとんのむげんかん（前書き）

ども糖類です。ハイスピーディーに書いたので誤字脱字あるかもです。一応点検はしましたけどねw

今回は今回でまた締まりの無い話ですが見てやってください。

それでは第四話ですお！

よんわめ　こんとんのむげんかん

ドアを開けたら出現した少女はそのまま鼻血を出しつつも幽香を押し進め部屋に入り、こう言い放った。

「私はただ幽香さまと幽花さまのにゃんにゃんする様子を使用人として見届けようと思っただけです！」

「だまらっしゃい。それにどうやって入ってきたのよ。館のドアやら窓やら厳重に封鎖してアンタを反省させようとしたのに」

そう。幽花が寝付いたあと幽香は夢幻館の出入りできる空間はすべて封鎖して隔離していたのだ。それをこの少女はマスタースパークで飛ばされるも自力で戻ってきてヤンデレの持ち味の一つの鍵開けを行い、館に侵入するということをやってのけたのだ。

「ふっふっふ、甘い甘い。脇が甘いですよ幽香様！私を追い出したかったら可愛らしい幽香様の寝顔の写真で誘導するぐらいじゃないと意味無いですよ」

「案外簡単にできちゃうじゃない」

「しーっ。幽花様、それは言わないお約束・・・らしいです？」

少女はドヤ顔で自身の主人に説教のようなものをしているが、結局は「私は変態です」と言ってるだけの様なものである。それにつっこむ幽花と幽花をなだめるくるみ。見た感じは幼女二人が秘密の会話をしてるようでついつい頬が緩んでしまう。

「だからって何？進入・・・というか帰ってきたのはいいけどなんでこの子の部屋のドアに張り付いてハアハア言ってんのよ。頭可笑しいんじゃない？」

「フッ何をいまさら。私はもうどうしようもないくらいの幽香様、そして幽花様に変態的執着心を抱く頭が残念な存在ですよ！あ痛っ」

白い目で見つめる幽香を嘲笑うかのように変態宣言し、彼女に頭を殴られる少女。その殴られた反動でズササッと音を立てながら幽花の足元に転がる。

「ゆっ幽香様は加減をしてください！普通吹っ飛びませんよ？殴ったくらいで。・・・あっ！これは失礼。申し遅れました。私、この館の門番兼雑務をさせて頂いていますエリーです。これからよろしくお願いします、幽花様」

「あえっ？こっこちらこそよろしくね」

幽花を地面から見上げる形であいさつをする少女、もといエリー。それに戸惑いつつも返す彼女。

「先ほどはお名前を間違えてしまい申し訳ございませ・・・あ、白パン」

『地面から見上げる形』のまま先の無礼講といっても名前を間違えた点だけ謝罪しようとしたエリーだが今の幽花の服装は結構な短めな裾のミニスカートなので、その体勢だとちょうど良くパンチラどころかパンモロが出来てしまった。

「別に気にしてはな、なっなあああああ！？」

とても初心な幽花が、しかも少し前にはその人物に性的に襲われて泣き出したりした幽花は反射的に右足を上段まで上げて一気に振り下ろし

「ごふぁあ?!」

見事エリーを葬り去ったのだ。

「いや死んでないですって。エリーは生きてますよ!」

「くるみ、そこは素直に認めたらどうかしら?エリーはもうどうあがいたってもどって」

「きますよ!くるみが折角エリー生存論を出してくれたのにそれをぽっきり折ろうとしないでくださいよ」

くるみに即座に目薬で潤ませた目で緩和的エリー抹殺を試みた幽香だったがなんとか復活したエリーに突っ込まれる。

「チッ。幽花、今度格闘の訓練でもしてみない?できれば門番の一人や二人を瞬殺できるくらいにまでなって欲しいのよ」

「ゆっ幽香が言うならまあ考えてもいいけど私じゃ向いてないと思うわ」

「・・・・それはボケてるのかしら?つっこみ待ちなのかしら?」

「ふぇ?どういうこと?」

見ればエリーが居たところには大きなくぼみがある。結構頑丈なタイルやその下の構造を粉砕されていたのだ。

「こっこれは！？誰がこんなことを。折角のお部屋が台無しよ」

「貴女がやったのよ。今ここで。エリーに上段蹴りした所為で」

確かに自分は蹴ったと認めはするもくぼみをみてありえないと笑う幽花。

「嘘よ。私がそんな怪力出せるわけ無いじゃない。それくらい分からない？」

「いや現になってるから」

幽花は可愛らしく首をかしげ幽香に問うが即答される。それに驚いたのか目をまん丸にしてポカンと口を開ける。

「へ？これ、本当に私がやったの？」

「ええ、貴女がやったの」

「でもまだまだ威力が足りませんよ？幽花様。直撃を受けても私はこんなにピンピンしちゃってますから」

「・・・・エリー無理してない？私から貴女を見上げると相当顔色悪いし顔から血が吹き出てるし」

言葉では大層強気なエリーだったがくるみの指示通り顔からが盛大に血が噴出し、顔も青褪めている。そしてそれをみた幽花が気を失

いフラッと倒れ、幽香が頭に手をあてやれやれとつぶやく。
といった身体をつかった漫談を長々と続けたせいで皆、当初の目的の部屋案内をすることをすっかり忘れてしまい各自自分の持ち場に戻ったり気絶した幽花をベットに運んだりするのであった。

よんわめ　こんとんのむげんかん（後書き）

読了感謝です！

・・・・ねむいw時間が5時とか丸一日おきちゃったよww

感想、コメントはとてつもなく大歓迎です！いつでもお待ちしてますのでお気軽にどうぞ！

それではまた次回～・・・・眠いw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6772y/

東方花妖怪

2011年12月18日05時50分発行